

ソローにおけるエマスの影響

R. W. Emerson's Influence as Seen in Henry Thoreau

山田 正雄

YAMADA Masao

Abstract: From the viewpoint of Emerson's influence, I tried to clarify that Henry Thoreau completed his self-realization by doing his own practical philosophy, and developing uniqueness through using his ability of invention. The most important matter is that he practiced an experimental life by the shore of Walden Pond in order to confirm his knowledge. He studied Emerson's concepts of Over-Soul and Self-Reliance, as well as Upanishad philosophy, Platonism, Neo Platonism and English-German Idealism. Gathering these facts together, I concluded that Thoreau succeeded in developing his own thought being independent from Emerson's thought. Thus, I clarified that Thoreau realized his dream to be a professional writer who was different from Emerson.

Keywords: Emerson, *NATURE*, Thoreau, *Walden*, originality,
エマス、『自然論』、ソロー、『ウォルデン』、独創性

1. ソローとエマスの関係

エマスとソローは1830年代後半と40年代半ばのアメリカ物質主義に反抗し、個人的経験を語って新しい時代精神を形成した。7代続いた名門の牧師家系出身のエマスが牧師時代を経て文人思想家になったのに対して、鉛筆製造業を営む家庭に生育したソローは、学校教師と鉛筆製造工及び私塾教師時代を経て文人思想家となった。国際文化的な視点からアメリカ人の新しい考え方、言わばアメリカ思想の形成を目指したエマス、個人の改革から社会改革を目指したソロー、2人はともに自然と社会に深く関わって生きた。

ソローがエマスから思想的影響を受けたことは明白な事実である。ソローにおけるエマスの影響を理解するため、(1)牧師辞任、(2)『自然論』(1836)著作の背景、(3)『自然論』の根本思想、(4)思想的源泉を明らかにしたい。(5)ソローがエマスから受けた思想的影響、(6)エマス思想をどのように独創的な思想として形成発展させ、(7)それにどのような意義があるかを検討したい。

2. エマスの牧師辞任

牧師辞任の背景的要因は、ボストン第2教会副牧師時代のエマスの宗教的懐疑にあった。それは新妻エレン・タッカー(Ellen Tucker)の1831年2月8日の死に起因している。エレンの死後、彼は宗教的慰めを試みたが、彼の魂は救済されなかったため、深い宗教的懐疑を抱いた。しかし、それは靈魂凝視と思索を続けたエマスに思想的深化をもたらし、異教的な神の觀念化を促進した。彼の靈魂凝視がエレンの死の1か月後に自己信賴の思想的萌芽を形成したことは、日記の記事が明示している。

A man contains all that is needful to his government within himself. He is made a law unto himself. All real good or evil that can befall him must be from himself.... The purpose of life seems to be to acquaint a man with himself. He is not to live to the future as described to him but to live to the real future by living to the real present. The highest revelation is that God is in every man. ①

人間は自分を治めるために必要なものをすべて自己の内部にもっている。人間が自己の法則である。人間に起こりうることは、善悪に拘わらず、自分自身から生ずる。… 人生の目的は、人間に自己を知らせることではないだろうか。人間は他人が描いてくれた未来に生きるのではなく、真の現在を生きることによって、真の未来のために生きるべきである。人間に啓示された最高の真理は、神は各人に内在するということだ。

更に、“The religion that is afraid of science dishonors God & commits suicide.” ②「科学を恐れる宗教は神を汚辱し、自殺行為を行なうものだ」とか、“Religion is the relation of the Soul to God, & therefore the progress of Sectarianism marks the decline of religion.” ③「宗教は魂の神に対する関係であるから、宗派の発展は宗教の衰退を表わす」といったエマスの教会批判の記事が散見される。更にまた、彼は“God in us worships God.” ④「我々の内部の神が神を礼拝する」と神の内在性の信念を表明し、教区訪問や聖餐式など教会の形式主義を批判した最終説教「主の晩餐式」(1832) “The Lord Supper”を行ない、1832年9月9日に教会と訣別した。重要なことは、エマスの牧師辞任がキリスト教神学の限界に背を向けて、広い自由な立場から人間中心主義のアメリカ思想の形成を目指したという事実である。

3. 『自然論』著作の背景

牧師辞任後、約1年間のヨーロッパ旅行中、エマスはイギリスの文人思想家カーライル(Thomas Carlyle)から英独ロマン主義の洗礼を受け、帰国後カーライルを通してドイツ觀念論の超絶的理性を学び、更に經典『ヴェーダ』*The Vedas*、『マヌ法典』*The Code of Menu*、叙事詩『バガヴァット・ギーター』*Bhagavat Gita*などのインド哲学書や文学書を読み耽

り、それらに内包された観念論的世界観や理想的な生活規範と道德思想を学んだ。彼はピューリタニズム(Puritanism)との整合性をもつプラトン(Plato)、プロティヌス(Plotinus)の神秘主義など雑多なイズムから自分に適した古今の東西思想を駆使して靈魂の観念化を進め、特にインド哲学の強い影響を受けて人間の靈魂と神が同一概念であるという信念を固め、人間の靈魂の背後に大靈“Over-Soul”の存在を想定する大靈思想を形成した。このように、エマスの思想的深化のプロセスは、靈魂凝視だけでなくプラトニズム、英独ロマン主義、東洋思想の研究によって達成され、『自然論』で結実したとみなされるべきである。

4. 『自然論』の根本思想

エマスの超絶的思索の背景に、生得觀念の白紙状態を説くイギリスのロック(John Locke)の経験論からイギリス・ロマン主義と超絶的理性を標榜するドイツ観念論を経て、プラトニズム及びネオ・プラトニズムとインド哲学にいたる新旧の東西思想が流れ込んでいる。『自然論』は自然の存在目的が探求された8章構成の研究論文である。これはエマスが人間性肯定の立場から自然解釈し、「人間の神格化」を語って人間性解放の思想を主張したものである。それは彼が何物にも制約されない個人の無限性を希求したためであった。その根本思想は、物質と精神の二元世界を現象とみなし、この現象界を統一する普遍的精神を観念化して、普遍的精神を直観的洞察力によって一元世界にいたる、言わば人間と神の関係が統合された大靈思想である。

5. 『自然論』の思想的源泉

大靈思想の源泉がインド哲学とギリシア哲学のいずれにあるかという点に関して、カーペンター(Frederic I Carpenter)は『エマスとアジア』で限定できないと結論づけた。^⑤しかし、エマスの大靈の概念は、必ずしもプロティヌスの「世界靈魂」“World Soul”に限らず、インド哲学における『バガヴァット・ギーター』の「アディアトマン」“adhyatman”すなわち宇宙最高神と緊密な類縁関係にある。しかも、エマスが1830年代と40年代前半にインド聖典『ヴェーダ』、『マハバラータ』*Mahabharata*, 『ヴィアース』*Viasa*, 『マヌ法典』を読書したことは、彼の日記が明示している。最終的に、彼は大靈と強い類縁関係にあるインド哲学における梵我一如すなわち“atman”と“Brahman”の合一という思想的内実を表現するためにプロティヌスのギリシア神秘主義を用いたと解釈するのが妥当である。従って、エマスの大靈の思想的源泉がインド哲学に負っていることは疑問の余地がない。

エマスは、厳密な思想体系をもたないにも拘わらず、大靈思想によって「人間の神格化」を主張したのは、合理主義的人間観に対するアンティ・テーゼを構築するためであった。彼は19世紀アメリカ思想の閉塞化かつ激動の時代に生きる同時代人に対して、東洋

的な汎神論的自然観に基づいた大霊思想を説いて生きる勇気と指針を与えた。それはアメリカ西部の豊饒な未開の大自然と大陸国家形成の発展途上にあった時代に漂う楽天的雰囲気と無縁ではない。宗教的伝統と物質文明の繁栄に反抗して、進歩の観念と社会改革を繋ぐことを試みたエマスは、ひたすら自然＝自我＝神の関係を永続的に探求して人間性解放の思想としての大霊思想を説いた。人間と社会に深く関わって、人間＝神であり、相互に尊重し合う個人の関係を思索したエマス思想は、紛れもなく民主主義的個人主義と西部開拓者の自主独立の精神を融合させる遠因となった。エマスの自然解釈に始まる大霊思想の理論形成は、大局的に見ると、アメリカ思想の形成という意味において重要であると言わねばならない。

6. ソローが受けたエマスの影響

ソローの自然愛あるいは自然探求は、終生一貫して見られる。ハーディングによると、少年時代のソローは自然に対する関心を共有する両親の影響を受けながら成長した。両親は子供たちを戸外に連れ出して丘や川の堤防や池畔でよく食事をしたものであった。⑥ 戸外での楽しい体験だけでなく、毎年冬期に博物学の講演を聴くためコンコード・ライシウムへ両親に連れて行かれた体験がソローの自然愛を育んだことは容易に推測できる。

学生時代のソローは、放課後に野原を散歩する以外には、図書館で読書に多くの時間を割く読書家であった。彼は大学 3 年次にエマスの『自然論』（1836）を読んで深い感銘を覚え、1 冊分を写筆して自分の蔵書とし、もう 1 冊を写筆して学友アレンに卒業記念品として贈った。⑦ 重要なことは、ソローが人生の重要な時期にエマスの深い影響を受けて、精神的視野を拡大されたという事実である。そして、大学卒業後に帰郷した彼は、ボストンからコンコードに転居したエマスとの友情関係を永続的なものに発展させ、物心両面にわたる援助を受け続けてウォルデン池畔における実験生活への道を辿った。

『ウォルデン』第 2 章「私が生きた場所と目的」で、「朝風は永遠に吹き、創造の詩は遮られることはない。だが、それを聞く耳をもつ者がいないだけである。オリンパスの神山は、戸外のいたるところにある」⑧ と表現したソローの汎神論的自然観は、エマスが『自然論』第 7 章「精神」で、「自然の最も崇高な使者は神の幻影として存在する。自然は普遍的精神が個人に語りかけ、個人を普遍的精神に連れ戻す器官である」⑨ と説いた思想と同一である。

ソローがエマスから受けた思想的影響は、第 1 に「自然は人間を創造する神」に導くと解釈された自然宗教、第 2 に大霊思想＝自己信頼（神信頼）に基づいた理想的に生きる人生哲学、第 3 に古今東西の雑多な思想による世界観の拡大である。

7. ソローの思想的発展

ソローはエマス思想に確証を得るために池畔の実験生活で実践に移した。彼が不断の

自然親交によって、自然は人間精神を創造に導く崇高な存在であるとみなしたことは、『ウォルデン』が明示するところである。彼は自然との神秘的合一の意識体験について言及している。

This is a delicious evening, when the whole body is one sense, and imbibes delight through every pore. I go and come with a strange liberty in Nature, a part of herself. As I walk along the stony shore of the pond in my shirt-sleeves, though it is cool as well as cloudy and windy, and I see nothing special to attract me, all the elements are unusually congenial to me. ...the note of the whip-poor-will is borne on the rippling wind from over the water. Sympathy with the fluttering alder and poplar leaves almost takes away my breath; yet, like the lake, my serenity is rippled but not ruffled. ⑩

快い夕方である。全身が1つの感覚になり、喜びをすべての毛穴から吸収している。私は自然の中でその1部となって不思議な解放感を感じながら、行き来する。私はシャツの袖をまくって石ころだらけの池畔を歩くとき、曇天で風が吹いているほど涼しく、特に私を惹きつけるようなものはないのだが、すべての原子がいつにもなく私と適合している。…。ヨタカの調べが遠くの水面に波紋の風を立たせている。ハンノキとポプラの木の葉のざわめきと共感して、私は息が詰まりそうだ。だが、湖のように、私の穏やかな心は揺れるが掻き乱されることはない。

これはエマスンが体験した悟り、言わば梵我一如の意識体験と同一のものであるが、表現上の相違が明らかである。

In the woods, we return to reason and faith. There I feel that nothing befall me in life, — no disgrace, no calamity (leaving me my eyes), which nature cannot repair. Standing on the bare ground, — my head bathed by the blithe air and uplifted into infinite space,— all mean egotism vanishes. I become a transparent eyeball; I am nothing; I see all; the currents of the Universal Being circulate through me; I am part or parcel of God. ⑪

森の中で、我々は理性と信仰に戻る。そこでは、目さえ残れば、恥も災いも自然が償うことのできないようなものは何も降りかからないと私は感ずる。荒涼とした大地に立つと、私の頭は新鮮な大気に洗われ、無限の空間に頭をもたげる。すべて卑しい利己心は消え去る。私は透明の眼球になる。私は無である。私は一切を見る。普遍的存在者の流れが私の中を循環する。私は神の1部であり分子である。

エマスンが「透明の眼球」と視覚だけを用いたのに対して、ソローは触覚、聴覚、視覚だけでなく全身を用いる表現をしている。このことは、彼の生き方が理性に偏らず、五感重視のアプローチを象徴的に表している。ソローの自然と自我の関係についての表現は、エマスンよりもダイナミックである。更に言えば、ソローには紛れもなく、エマスンが「ア

メリカの学者」(1837) “The American Scholar”で説いた総合的能力をもつ寓話的人間像と行動を重視する実際主義的人間像が融合している。

ソローが知識や思想を実践する生き方には、エマスの自己信頼の影響によるものであるかもしれない。しかし、エマスと異なって、ソローが生得的な手先の器用さに自信に抱いていたため、思想のための思想に留めずに、思想を実践に移す自己信頼的哲学に基づく生き方があったことはウォルデン池畔での実験生活を見ても明らかな事実である。たとえば、彼には2隻の舟作り(ローバー号とマスケタキッド号)、ウォルデン小屋の建築、自宅の建築、庭作り、キャビネット作り、土地測量、農業などを独力行なうことができた。また、ソローの自己信頼的な生き方は、エマスの大霊思想を実証するため、彼がバラモン僧のように、『マヌ法典』のようなインド哲学を実践に移して神探求を実践したこと、たとえば池畔の小屋の前で瞑想したり、池で沐浴したり、米食したり、森の奥深くに聳え立つ樹木を卒塔婆(パゴダ)に喩えて礼拝したことが明らかに物語っている。彼が手先の器用さと技術を用いて多様な知識や思想を実践に移し、行動的かつ求道的に生きて独創的な思想を形成したことは、もはや疑問の余地もない。

ソローがエマス思想から独立した独創的な文人思想家となりえたのは、彼の手先の器用さと技術を用いた発明の才にもよるが、自己信頼的な実践哲学に基づいた生き方にあることは確かな事実である。ソローがエマス思想ばかりでなく、インド哲学、ドイツ観念論哲学、ギリシア思想などの知識や理論を実践して真理を探求する生き方を貫くことによって初めて独創的な思想を形成して発展させた。換言すれば、ソローは理論よりも行動、理論の実践によって Identity を確立したとみなすことができる。

手先の器用さと発明の才及び技術を駆使するソローの生き方は、はやくも学生時代から発揮され、大学卒業後の鉛筆製造業で黒鉛製粉機の考案と開発、鉛筆製造工程の短縮、工具の開発、鉛筆の品質改良に顕著である。また、神の顕現として自然を探求したエマスとは異なり、ソローは自然を思考対象とするだけでなく、博物学、鳥類学、森林学、湖沼学、気象学といった科学的分野から生態学的な観測調査を行なった。更にまた、彼はイースト菌なしの製パン実験とか葡萄パンの発明、偶然的な自然交配によるシトロン・メロンの品種改良など科学的な発明家精神によって自己実現の達成をもたらした。ソローが示した考案力と手先の器用さと技術を駆使する実践的な生き方は、エマスには全然見られない。

8. ソローの思想的発展の意義

ソローが大学卒業から8年後の1845年7月4日にウォルデン池畔での実験生活に漕ぎ着けたのは、すでに超絶主義運動の黄昏期であった。しかし、その実験生活は、ソローにとって、エマス思想の影響から独立した独創的な文人思想家になる夢を実現するための重要な計画であった。結局、彼は多様な知識を用意周到に準備して実践に移した結果、エマ

スン思想とは大きく異なる独創的な人生哲学と科学思想を公表することができた。前述したように、ソローは自然を単なる思考対象としての思想的存在でなく、博物学、鳥類学、森林学、湖沼学、気象学など科学的な観測調査に基づいた自然環境とみなし、生態学的研究の試みと自然環境保護を実践した。このことは、エマスンには見られないソローの特質であることに思いを致すべきである。

ソローは『ウォルデン』第18章「結論」で実験生活における多様な知識と思想及び考案と技術を駆使して成功した経験について語った。

I learned this, at least, by my experiment; that if one advances confidently in the direction of his dreams, and endeavors to live the life which he has imagined, he will meet with a success unexpected in common hours. ⑫

私は経験から、少なくとも、このようなことを学んだ。人は夢に向かって前進し、自分が想い描いた人生を生きるために努力するなら、普段の時間に思いがけない成功を収めるであろう。

このような彼の言葉には、兄ジョンの追憶のエッセイ(後に『コンコード川とメリマック川での1週間』となる)と『ウォルデン』の草稿を完成するという実験生活の当初の目的を達成したことも含まれている。

最終的に、ソローは自己信頼の精神と実践哲学に基づいた実験生活の経験によって物質主義に陥って絶望することなく、一回性の人生を創造的かつ活き活きと生きることができることを同時代人に公言したところに大きな意義がある。そして、彼の生き方が現代人に今なお新鮮な印象を与えるのは、個人の改革を通して社会改革が実現可能なことを示唆しているところにある。

NOTES

- ① Ralph Waldo Emerson, *The Journals and Miscellaneous Notebooks of IV*, ed, Alfred Ferguson, The Belknap Press of Harvard University Press, 1964, p.84 (以下 JME と略す) *JME, IV* September 3, 1833
- ② JMN, IV March 4, 1831
- ③ Ibid, June 20, 1831
- ④ Ibid, July 15, 1831
- ⑤ F. I. Carpenter, *Emerson and Asia*, Haskell House Publishers Ltd, 1968, 121
- ⑥ Walter Harding, *The Days of Henry Thoreau*, Princeton University Press, 1982, 10
- ⑦ Ibid, 60
- ⑧ Thoreau, *The Writings of Henry David Thoreau, II*, AMS Press, 1968, 94 (以下 *Walden* と略す)
- ⑨ Emerson, *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson, I*, AMS Press, 1968, 62

(以下 *Nature* と略す)

- ⑩ Thoreau, *Walden*, 143
- ⑪ Emerson, *Nature*, 10
- ⑫ Thoreau, *Walden*, 356

References

- Carpenter, Frederic Ives, *Emerson and Asia*, Haskell House Publisher, 1968
- Emerson, Ralph Waldo, *The Journals and Miscellaneous Notebooks of IV*, The Belknap Press of Harvard University Press, 1964
- Emerson, Ralph Waldo, *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson, I*, AMS Press, 1968
- Harding, Walter, *The Days of Henry Thoreau*, Princeton University Press, 1982
- Thoreau, Henry David, *The Writings of Henry David Thoreau, II*, AMS Press, 1968